滋賀県立陶芸の森のあり方に関する懇話会第1回会議　議事概要

1　日　時　令和5年 11 月 21 日(火)10:30～14:30

2　場　所　滋賀県立陶芸の森視聴覚室

3　出席委員　辻田委員、洲鎌委員、山崎委員、玉置委員、近藤委員、松井委員

4　議題
（1）座長の選出について
（2）滋賀県立陶芸の森の現状等について
（3）現地視察
（4）意見交換
（5）その他

5　会議概要　以下のとおり

事 務 局	（1）　座長の選出について ・　委員の互選により辻田委員が座長に選任された。 （2）　滋賀県立陶芸の森の現状等について ・　事務局から資料1、2により説明 （3）　現地視察 ・　陶芸の森内の創作研修館、産業展示館、陶芸館を視察 （4）　意見交換 意見交換欠席委員の意見を紹介 ・　陶芸の森の設置目的を時代の変化に応じて捉えなおしたうえで事業内容を検討すべき。 ・　作品展示の実施、地元住民等を巻き込んだワークショップの実施、陶芸と日常生活とを結びつけて提示すること等、また、陶芸の森の取り組みを情報発信することで人が訪れる場所としていくこと。 ・　実施すべき事業内容について検討を行うとともに、「次の 30 年を見据えた設置目的」を関係者間で共有し、その実現に向けて事業を着実に実施することが重要。
座　　長	事務局からのコメントや補足があれば伺いたい。

事 務 局	ご意見はごもっともであると受け止めている。陶芸の森の現状や利用者のニーズ、あるいは信楽の町の状況を踏まえたうえで、懇話会にご参加いただいている委員の方々には、今後、陶芸の森がどういう目的趣旨でどのような事業を展開していく必要があるか、という点についてご意見をいただきたい。
座　　長	今の設置目的のためにやりづらい事業や縛られていることがあれば伺いたい。
委　　員	設置目的でいうと、「陶芸に対する理解と親しみを深め」という文言があり、陶芸の森が陶芸だけの文化振興を行っていると思われる。委員の仰るとおり、現代の生活を強調しないと見えてこない部分がある。決して陶芸だけにこだわる必要はない。文学や芸術一般、滋賀の物産といったものを焼き物と結び付けて紹介できれば良いのではと考える。そうなると、今の陶芸の森の設備は AIR（アーティストインレジデンス）事業のための創作研修館と美術館機能を持つ陶芸館と2極化しており、両者の接点が見えてこない。本来は産業展示館に両施設の取り組みを結びつける機能を持たせるべきであり、産業がどのように生活に関わっているのかということを見せないといけない。旧来のタヌキやお茶碗だけを並べるのでなく、生活文化というものを見せていかないといけないと考える。
座　　長	産業展示館の位置づけについて、意見を伺いたい。
委　　員	かつては、産業展示館にお茶とか信楽の販売ブースはなくて、平成10年頃から販売スペースできた。展示部分について、焼き物を活かした生活文化の発信という役割を産業展示館に持たすべきと考える。創立から 30 年以上が経過していると考えると、施設の役割が時代にそぐわない点もあると考えられるので、今後、陶芸文化が人々の生活に溶け込んでいっていることを発信できる施設になれるよう議論をした後にハード面の話も進めていきたい。
座　　長	産業振興が設立趣旨で謳われているものの、取り組み内容が漠然としているように感じるが、この点について意見を伺いたい。

委　　員	信楽の地場産業はもともと文化としてとらえられていたが、次第に地元の観光産業の中心として考えられるようになり、信楽に来てもらうための資源という考えが強くなってきた、という経緯がある。陶芸の森と地域との接点をどのように発展させていけるかという点について、委員の言う、「地元住民等を巻き込んだワークショップの実施」というのは同意である。そして、それらを実施していく中で地元の地場産業の方々とどのようにかかわるか、という点を議論していきたい。
座　　長	試験場の立場から陶芸の森と共同できる事業案があれば伺いたい。
事 務 局	すでに資料2（滋賀県立陶芸の森の現状等について）で試験場との連携等が挙げられているが、産業振興という点で、セラミック・アート・マーケットや作家市を通して交流や支援は既にあると考える。メーカー（信楽焼製造業者）との連携については従来と比べると減ってきているところであり、これからの信楽の産業をどうしていくのかという方向性をメーカーとも共有していくことが必要と考える。
座　　長	設置目的についてどう思われるか。
委　　員	陶芸文化に関する施設は全国的にも数少なく、価値がある。陶芸の森におけるこれまでのワークショップや AIR 等の活動の積重ねが信楽の地のブランディングや質の高さを世界に発信していることにつながっていると考えている。産業展示館についてだが、展示がメインでない以上は名前が実態に合っていないように思うので、別の名称を検討してもよいのではないか。
委　　員	今後、設置目的そのものを懇話会で検討する論点の一つとしたい。陶芸の森で税金を使って事業をするという点と陶芸の森を利用して税収を増やすという点があると思うが、事業の現状について委員から説明いただきたい。
委　　員	税金を使って取り組んでいる事業として AIR 事業があり、海外において、焼き物といえば信楽、という共通認識が持たれるほどに著名な AIR 事業となっている。交流規模もかなりのもの。この AIR 事業について、当初は本事業による交流を通して日本の文化を世界に広め、日

	本にないものを我々が受け入れるということだったが、その結果がどうであったのかを今、検証する必要がある。また、文化はお金に直結するものではないが、昨今は文化＝金という風潮があり、このことを危惧している。文化＝金を追及すると即席芸術ばかりになりかねない。文化を 10 年、20 年かけてお金に結び付けていくプログラムが必要であり、どのようにして 10 年、20 年後に県民に還元させていくかを明確化していくことで取組への理解も得やすいと考える。もう一つ重要だと考えるのは子どもたちへの教育である。これについても陶芸の森では 30 年以上かけて実施してきた。しかし、子どもは子どもの時にやったきりで、学んだことを大人になってまで継続しない。どのように生涯教育化していくかが課題。子ども、成人、青年、老人の各段階に向けた陶芸文化のプログラムを作ることが大切と考える。
座　　長	産業につながる事業はないか。
委　　員	AIR 事業では有名なアーティストが来られている。そのアーティストの作品を販売するためのギャラリー機能を整備するとともに、国際的なマーケットにアクセスしていかないと、陶芸の森としてお金につなげられる事業はないと考える。文化をお金にするのであれば、世界のアートマーケットにアクセスしないと、日本国内だけでは限度がある。
陶芸の森	補足すると、現在、陶芸の森主催のセラミック・アート・マーケットを実施している他、当館主催ではないが、実行委員会が運営する作家市を開催している。また、陶芸の森の敷地を貸し出して、女性作家が中心のクラフトマーケットの開催など、信楽の方々だけでなく、県内事業者含め、陶芸作品の販売や情報提供の場として陶芸の森を活用いただいていて、産業振興に一躍かっている。
委　　員	場の提供という活用は有益に働いていると感じている。こういったイベント開催等の取組を発展させていく、恒常的にサポートしていくには周辺関係者の同意が必要と考える。
陶芸の森	追加で補足させていただくと、地元の地場産業の陶芸家の方々が陶芸の森に来て、実際の窯をお貸ししており、そうした面での産業振興に関与している。ただ、地域の方々から、その価値を認めてもらうという点でいうと、見せ方の工夫が必要と考える。

委　　員	現在、信楽焼の中心地として陶芸の森と長野地域があり、この二つに窯元が集積しているが、両者の精神的距離が遠いように感じる。陶芸の森設立当時、二眼レフ構想というのが立ち上げられて、長野では陶工が信楽焼を作成し、信楽には陶芸文化の魅力を世界に発信していく施設として陶芸の森があり、互いに対立関係になることなく、この30 年間が経過した。現状を考えると、少子化というのが一つの問題で、信楽焼の後継者が少なくなってきている。産地として、しっかりと収入を得ていくだけのモノづくり文化が引き継がれておらず、信楽の産地の総生産で見ると、ピーク時と比べ、いまは5分の1まで減ってきているという現状である。今、甲賀市ではエリアイノベーションとして、長野界隈の特に窯元散策路をリノベーションして、焼き物だけでなく、ガラス工芸や金属、絵画等、様々なアーティストに空き工房を活用してもらい、人を集め、飲食店等もできるという仕組みを模索しており、これにより信楽焼の産地としての価値がレベルアップしていくのではと考えている。そして、ゆくゆくは長野だけでなく、陶芸の森界隈も含め、前述した二眼レフ構想のような形で実施できればと考えている。一点お尋ねしたいのだが、世界からアーティストの方に来ていただいているとのことだが、その方々と地元の信楽焼に携わる方々との交流の場はあるか。
委　　員	レジデンスで来られたアーティストの方々が自国の料理をされる際に近隣の人が集まる、ということはかつてからあった。これは非常に良いことだと考えるが、私は一つのプログラムを作ることが大切だと考えている。今、初めて二眼レフ構想について伺ったが、これは良い取り組みだと感じる。今、世界中で薪窯を焚きたいという人が多い。しかし、日本国内で煙を出していいところはほとんどない。陶芸の森の窯は十分活用できているが、これだけでは足りない。SDGs の時代において薪窯活用の再価値化を考えるのであれば、新たな教育プログラムを立ち上げ、年間を通して参加者を指導するインストラクターとして、伝統工芸士の方等に来ていただき、この取組を海外および国内に向けて発信していく、といった教育プログラムを作るだけで、町も大きく活性化すると考える。信楽焼振興協議会と陶芸の森が協働して、試験場がデータに基づいてバックアップするという仕組みができれば、一つの町づくりの仕組みになると考える。

陶芸の森	アーティストの方々は信楽という地に価値を感じられてやってこられる。館長が言うプログラムまではいかなくとも、陶芸の森として、滞在されたアーティストの方々を窯元に案内をしたりして地元との関わりを増やしていく取組や、財団の参与がスタジオを保有しているので、そこと連携しながら焼き物を焼く作家を巡るような取組を地道に行っている。せっかく、この信楽の地を選んできていただいているアーティストの方々とのつながりは持ちたいと考えている。
委　　員	滞在アーティストと地元との交流が全くできてないということを指摘しているわけではなく、そういう取組が見えていないと感じるし、知らない人が多いとも思う。世界のアーティストの方々と信楽や滋賀県の子どもたちが触れ合える交流プログラムができると陶芸の森の価値が上がる。
委　　員	それには窯場が適していると考える。その場でプロの作家と子どもが集まって火を焚けるという仕組みができればよい。現に海外から私宛に窯を焚きたいという声も届いているが、私個人で対応したところで陶芸教室にとどまる。窯を中心に火を焚くという空間を確保し、その魅力を海外に向けて発信するという取り組みをプロジェクトとしてやっていきたいと考える。
座　　長	今の意見についていかがか。
委　　員	全く同感である。作家市やセラミック・アート・マーケット等の陶芸の森の取り組みは承知しているし、そういう交流の場ではそれぞれの思いが通じるとともに作品にも影響を与えると考える。
座　　長	本日、現地視察を行ってのご意見を各委員に伺いたい。
委　　員	最近、京都の若手や中堅の作家は信楽に移り住んできていて、信楽が昔の焼き物の地ではなく、今も生きる土地と評価されていると感じる。今日の視察にて、陶芸の森と信楽の町あるいは甲賀市全体と連携ができているのかなと疑問に感じた。今後、うまく連携していくことができれば、それぞれがもっと活発になるのではと感じた。また、委員から税金を使わずに価値を生み出す、との意見があったが、これまで税金を使っていたとはいえ、広報費も加味すると現時点で陶芸の森は

	十分なものを産出しているのではないかと感じた。
委　　員	広報についてだが、手段としては口コミ、インターネット、紙媒体等があるが、まだインターネットの活用に対応しきれていないと感じる。例えば、今はライブで配信して、視聴者と交流できるので、そういうものを活用して市民との交流の場が作れると思う。しかし、ネット上だけで完結すると炎上しかねないので、必ず現場（展覧会）に来てもらうということを意識して、実際に展覧会をどうやって作っているのかという事前準備の情報をライブで配信すると良いと考える。また、レジデンス作家の活動内容を公開することも可能。そして、Zoom で滞在アーティストと国外の作家のフォーラムを作る等、できることは様々想定される。しかし、ここで人手不足という課題が出てくる。インターネット活用にたけた人材が必要となる。今はこういった人材の確保という視点が抜け落ちているように思う。意識改革も必要だが、設置目的に「文化交流」を据えることが重要であると考える。
委　　員	交流についていえば、コーディネートできる人材が必要。
座　　長	例えば産業と芸術や、地元と海外から来られたアーティストとの交流等、様々な人々をつなぐ役割を担う人はいないのか。
委　　員	財団の参与のような人のことか。
委　　員	その方は対面の関係に関しては能力をお持ちでいらっしゃる。
座　　長	ネット関係となるとどうか。
委　　員	なかなかいない。
座　　長	東大阪や八尾、東京の太田区だと、大学生が地元中小企業を一般の方に広く紹介する動きがあったりするが、そういう取組はここではないのか。
委　　員	大学との連携は重要であると考える。最近の大学では工芸教育が廃れていって、単に技術になってしまっていて、工芸の思想を教える場所がなくなっている。例えば、陶芸の森あるいは信楽の町と大学が

	連携して、工芸の思想を学ぶ場を作る。学生にとっては一つの勉強の場になるので、リサーチであったり、分析だったりを教育の現場でタダでやってもらえる。しかし、こういった仕組作りをするには、やはりコーディネートできる人がいないと、というのが課題となる。
委　　員	陶芸の森の取組は守備範囲が広く、子どもからお年寄り、外国の方までを対象とした陶芸に関する包括的な基地という性質があり、陶芸の森は信楽になくてならない存在になりつつある。そして、商業の現場から言うと、最近、開業の相談が増えてきている。なぜかというと、人々との交流ができてきているからだと感じる。セラミック・アート・マーケットに出店した方がその後に創業の相談に来られたりする。長期の視点で考えると、そういった人が税金を納める人になってくれると思う。そして、こういった人々の交流を深めていくにあたり、設備ももちろんなくてはならないのだが、それを使いこなせる人も必要であって、その充実をどうやって図るかが課題であると感じた。
委　　員	委員が仰られていた「税を使って運営するということの必要性」を市民の方々に示す必要があるというのはもっともだが、何をもって示していくのかを考えないといけない。特に文化というものは、お金をつぎ込んでから 1 年あるいは 2 年年で効果が出るものでないので、長期的にみてお金を投入することの説明ができるロジックがないといけないと感じた。
委　　員	新しいプロジェクトの立ち上げが本当に必要なのか。例えば、長野地域との連携等、今あるものでできることがあるのではと思う。
座　　長	意見交換は以上で終了とする。次回懇話会に向けて、今回の意見交換の内容を踏まえた資料作成をしていただければと思う。
	（5）その他
座　　長	事務局から何か連絡事項等があれば。
事 務 局	次回懇話会については3月を目途に開催したいと考えており、改めて日程調整をさせていただく。
座　　長	では、以上で第1回目の懇話会を終了する。